
魔法使い見習いの夜

4E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使い見習いの夜

【Nコード】

N1175U

【作者名】

4E

【あらすじ】

魔法使い見習いの男に襲いかかる試練、そして葛藤。

苦悩の果てに、彼はなにを見るのか……。

(前書き)

練習用として書き上げた一作です。
続きはありません。

「ふあ〜あ、お兄ちゃんおやすみい」

「……………おう、おやすみ」

それはいつも通りの就寝前的一幕。

大きなあくびをしながらおやすみを言う妹に対して、ぶっきらぼうに返事を返す俺。それは、どこにでもありそうなありふれた兄妹のやりとりだった。

何もおかしいところはない。そう、何も問題は無いはずなんだ。

……………ただ一つを除いては。

「うう〜、おふとんふつかふかだよお」

布団に潜り込み幸せそうにつぶやく妹。

そうかあ、おふとんふつかふかかあ、昼間ベランダに干したからなあ、おひさまをたくさん浴びただろうし、さぞふかふかになってるんだろうなあ。……………それはそうとだな、

な　ん　で　俺　の　布団　で　寝　る　ん
だ　よ!!!!!!!!!!

ただ一つの問題。それは、妹が潜り込む先が俺の布団であるということだ。……………いや、少し訂正しよう。正しくは俺の布団というよりも、俺と一緒に布団というのが的確だろう。

つまり、俺と妹は一緒に布団で寝ているのである。そして、それも含めていつも通りの光景なのである。

……………いつたい、いつからこの習慣が始まったんだっけなあ。あれは……………そう、確かコイツがまだ小学校低学年だった頃か。

テレビの洋画劇場で放映されたホラー映画。それを観た日の夜中、「怖い夢を見た」と泣きべそをかきながら、枕を抱えて俺の部屋を

訪ねてきた妹。

あれが、全ての始まりだった。あの時、妹を布団に招き入れてしまつて以来、何か用事があつて家を空ける時以外は、二人一緒の布団で寝るのがすっかり習慣になつてしまつたのである。

思えばあれから十年。赤いランドセルがよく似合う可愛らしいちびっ子だった妹も、今ではティーンエイジャー、なんとというかすっかりお年頃。かたや、俺のほうはというと、輝かしいティーエイジャーの時代は既に彼方へと過ぎ去り、魔法使いになる日が刻々と迫りつつあるのが現状だ。

そう、俺は魔法使いになる資格を有しているのである。清い体と心の持ち主なのである。

そんな魔法使い見習いとも言える俺にとって、年頃の妹と一緒に布団で寝るといふ行為はとてつもない苦行だ。

正直、うちの妹は可愛い。とてもとても可愛い。ほんわかとした性格、どこかお人形さんみたいなルックス、そして日々のちよつとした仕草まで、何もかもが愛くるしくてしょうがないのだ。これは兄としてのひいき目では断じてない。もし、うちの妹を見て可愛くないとかぬかす奴がいるとしたら、そいつは間違いなく視神経が脳に障害を負っている。

「すう……すう……」

布団のほうに目をやると、もう妹は寝息を立てていた。あいかわらず寝付きの良さは人一倍だ。

「はあ……、俺も寝るか」

色々と思うところはあるが、今さら別々の布団で寝ようと改めて切り出すのも、何だか妹を女として意識しはじめたみたいで少し気まずい。

(ええ)、兄妹なんだから一緒に布団で寝たってなんの問題もないよ。それともお、お兄ちゃんはこのままだと何か問題を起こしちゃういそうだからそういうことをいうのかなあ？ お兄ちゃんってば、えっちい〜ケダモノ〜)

……コイツ、絶対にそういうことを言い出すよな。それも、いたずらっぽい笑みを浮かべながら顔を俺の鼻先まで近づけて。

言っておくが、俺はえっちではあるかもしれないけどケダモノではない。いくら魔法使い見習いで日々悶々としているからといって妹に手を出したりはしないのだ。

「俺はケダモノじゃない……俺はケダモノじゃない……」

そんな呪文をぶつぶつと繰り返しながら俺は布団に潜り込んだ。

「ぐ、ぐわあ……」

妹の隣へ体を潜り込ませた瞬間、強いアロマの香りが鼻腔をくすぐった。妹の髪から漂うシャンプーの香り。これがまたたまらなくイイ匂いで、いつもこれを嗅ぐたびに頭の奥がクラクラしてしまう。そんな、理性にとつての難敵とも言える相手との遭遇に思わずうめき声が漏れた。

お、落ち着け、落ち着くんだ俺。たかがシャンプーの香りじゃないか。こんなものはただの洗髪料に配合された化学薬品の匂いに過ぎない。そうだ、きつとこれを作ったのは研究者のおっさんだ。何日も風呂に入らず、無精ひげを生やしながら研究室に籠もって開発に没頭したに違いない。それを思い浮かべろ、妹のことは考えるな。「おっさん……無精ひげのおっさん……」

念仏のように唱えながら研究者のおっさんに思いを馳せる。

こんなにイイ香りのするシャンプーを開発したにもかかわらず年頃の娘からクサイとか言われるおっさん。

帰りの電車の車内で乗り合わせたOLたちの話題が自分が開発したシャンプーであることに感慨深げな笑みを浮かべていたら、変質者扱いされて駅員を呼ばれるおっさん。

自分の開発したシャンプーの売れ行きが気になって化粧品店を覗き込むも、店員から訝しがられるおっさん。

……なあ、おっさん。あんた、そんな扱いされて悔しくないのか？

(いえ、自分はただの研究者ですから)

いや、しかし、これだけ素晴らしいシャンプーを作ったあなたに
対して世の女性はちよつと冷たすぎやしないかい。

（自分は賞賛なんかありません。ただ、あのシャンプーの良さをわ
かってくれるお客さんがいればそれで満足なんです）

おっさん…… あんた、開発者の鑑だよ。

（身に余るお言葉、恐縮です）

……… おい、ところで俺はいつたい誰と話してるんだ？

ハッ、と我に返った俺は、心の中のおっさんに別れを告げ現実へ
帰還した。

ふう、危うく、よくわからない向こう側の世界へ旅立つところだ
った……。とはいえ、これでなんとかピンク色の衝動と理性との葛
藤に勝利することが出来た。もし、あそこで衝動のおもむくままに
行動していたら、妹の髪に直に鼻を近付けてシャンプーの香りをク
ンカクン力するという変態行為におよんでいたかもしれない。

まずいな、今夜はなんだかいつもより気持ちが落ち着かない。そ
う思った俺は、せめてもの対抗策として妹に背を向けて寝ることに
した。

「ふみゆう〜お兄ちゃん……」

妹の寝言が耳に入る。コイツ、もしかして俺の夢を見てるのか？
夢にまで登場するぐらい自分は妹から慕われている。そんなこと
を考えた途端、嬉しさが胸にこみ上げてきた。だけど、同時にその
嬉しさの中にほんのちよつとだけ寂しさが混じっていることにも気
づく。その寂しさの正体がなんなのか、本当は気づいているにもか
かわらず、俺はそいつから目を背けた。

……… だつてさ、兄妹なんだぜ。

そうだ、自分はコイツの兄貴なのだ。だから、誰よりも一番に妹
の幸せを願わなければならぬ。傷つけてはならない。信頼に背く
ような真似は絶対にしてはならないのだ。

ふと、なぜだか無性に妹の顔が見たくなった。俺は、理性を保つ
ための対抗策もどこへやら、もぞもぞと布団の中で体の向きをいれ

かえた。

「くう……くう……」

幸せそうな寝顔が目の前に現れる。正面から向き合う俺の顔との距離は、僅か一〇センチ。これが、狭い布団の中で取り得る、相手との精一杯の距離だ。

妹の吐息がかすかに顔にふれる。なんだか妙にドキドキした。

「ったく……おまえって本当にガードが甘いよな」

眠っている妹に向かってひとりぼやく。コイツはわかっていないのだ。今、自分と一緒の布団で寝ている男が魔法使い見習いであることを。

魔法使い見習いの頭の中なんてのはエロい妄想で溢れかえっているものと相場がきまっている。なかには来たるべき魔法使いになる日に向けて、すでに悟りを開いている者もいると聞かすが、俺は未だその境地に達してはいない。事実、視線がさつきから妹の柔らかな唇に吸い寄せられてしまっている。

……やっぱり、体の向きを変えるんじゃなかった。俺は少しだけ自分の行動を悔いた。

「むにゃむにゃ……お兄ちゃん……さあ、めしあがれ……」

何が召し上がれ、だ、バカめ。おまえは目玉焼き一つ焼けないどころか、玉子すら上手く割れんだろうが。いつも玉子かけご飯やスキヤキのたびに玉子を割ってあげてるのは誰だと思ってるやがる。まあ、可愛いからいいけど。

「おまえなあ……そう無防備だと、兄ちゃんおまえのことを召し上がっちゃうぞ」

心の内側から沸き上がりつつあるえっちい欲望をはぐらかすためにも努めて冗談っぽく呟いた。

「うっ……ん……むにゃむにゃ……いいよお、めしあがれ」

いやいやいや、よくねえ、よくねえってばよ！

思いがけない肯定の返事に頭がパニクる。いや、待て、落ち着け俺。今のは寝言だ、寝言にマジになってどうする。

「すうーはー、すうーはー」

乱れた心を落ち着けるために大きな深呼吸を二つ……………ぐはっ！ しまった、そんなことをしたらシャンプーの芳しい香りががが。

取り返しのつかない完全な判断ミス。鼻腔を通過して脳にまで確実に達したであろうシャンプーの香りが俺の理性を激しく揺さぶり、リビドーを刺激。瞬間、妄想がはじけた。

（お兄ちゃん……………その……………やさしくめしあがってね）

そう言っつて、真っ白なクロスが掛けられたテーブルの上に横たわる妹の姿を幻視する。もちろん裸だ。いや、シャツ一枚で前をはだけた格好というの捨てがたい。でかいリボンを体に巻いた姿はどうか？ いや、違うな、リボンは料理というよりプレゼントか。それよりは生クリームで体をデコレーションしたほうが扇情的だ。

「な、生クリーム……………ゴクリ……………」

思わず唾を飲む。

（やあん、だめえ、お兄ちゃんくすぐったいよあ）

し、仕方ないだろ。そうしないと上手く生クリームを舐め……………つて、俺は何を考えてやがるんだっ！

「じゃ、邪念よ去れ！ シャイニング・ブライトン！！！」

なぜか、とつさに思いだした若かりし頃に考案した光属性の全体魔法の名を叫んでしまった。ちなみにこの魔法を発動するにあたっては『まつろわぬ者たちよ、光の彼方に去ね』という前おきみみたいな呪文を詠唱しなくてはならない設定なのだが、あの頃よりも魔法使いに近づきつつある今の俺ならたぶん問題はない。

「ぜえ……………ぜえ……………邪念は去ったか」

荒く息を吐き出しながらも、ホッ、と胸をなで下ろす。

……………本当に危なかった。危うくピンク色の波動に飲み込まれるところだった。

ふと、妹のほうを見ると、さっきまでとまったく変わらない様子で寝息を立てていた。

けに多い。どうにもこの状況は泥沼だ。グダグダ考えるのは止めて、もう、このまま寝てしまおうべきなのではないか。そう結論づけたいところではあるが、どう考えてもこの状況でぐっすり眠れそうにはない。それに妹が朝起きた時に、自分のパジャマの胸元がはだけていることに気づいたら間違いなく面倒なことになりそうだ。

「ええい、とりあえず事態の収束をせねばなるまいか……」

何か重大な案件に向き合う指揮官を思わせる深刻な声色で呟いた俺は、意を決して体の向きを妹のほうへ戻した。

目的はパジャマのボタンを閉めること。それ以外の思惑は一切ない。

……おなかをこわしたり風邪をひいたりしたらかわいそうだしな。

そうだ、これは兄としての親切心ゆえの行動なのだ。途中、パジャマからこぼれた豊満な乳房を視界に収めることもあるだろうが、それもまた成り行き上仕方のないことなのだ。

よし、自分自身への言い訳は完了した。さあ、ミッションスタートだ。

俺は、妹のパジャマへと手を延ばし、四つあるボタンを下から順に慎重な手つきで閉じてゆく。

一つ……二つ……。ふと、へそ周りのおながが目に入った。

「……………えいつ」

プニプニと柔らかさそうなその部分を興味本位でつついてみた。

「ひゃん！」

「……！」

妹が上げたくすぐったそうな声に、心臓が止まりそうになる。

あ、あぶねええ！ 何迂闊なことしてんだ俺はッ！ ボタンに手をかけているとこで目を覚まされたら一発アウトだぞ！

寝ている妹のパジャマのボタンへ手を延ばす兄。構図だけ見れば、

どう考えても変態行動である。

……気をつけるんだ俺。お前は今、時限爆弾の解体にも等しいスリリングな作業に従事してるんだぞ。

自分を戒め作業に戻る。

さて、問題はここからだ。四つあるボタンのうち、下の二つはすでに閉じた。それと、一番上の首元のボタンは閉めずとも問題はないだろう。やはり、一番の難関は下から三つ目のボタンか。

俺は、そのボタンが位置する胸元へちらりと視線をおくる。

……ダメだッ！

本当は見たい気持ちがないわけじゃないけど兄として見てはいけないものが目に入り、慌てて視線をそらす。

しかし、ボタンを閉めるためにはどうしてもその部分を視界に入れなくてはならない。

ク、クソッ！　なんて困難なミッションなんだ。

俺は心の中でぼやいた。思い切って、妹のオパイをガン見しながら作業に当たればいいのかもしいないが、そんなことをしたら今度こそ理性の鎖が切れてしまいそうだ。そうなってしまうては元も子もない。

……そもそも、理性の鎖が切れたらどうなるんだろ？

激しく揉みしだくのだろうか。あるいは吸い付くのか。それか、顔を埋めてムニムニしたりするのかもしれない。何にしる兄としてはあるまじきあさましい姿をさらすことは確実だ。もしかして、もしかしたらオパイだけでは飽きたらずその先も……。

バカな！

頭に浮かんだイメージを必死に打ち消す。

俺が、コイツを、襲う？　いや、それだけはある得ない。そもそも俺はそういう鬼畜で強引なのは大嫌いだ。力づくで関係を迫るなんて男のすることではない。まあ、力づくで関係を迫られるのなら話は別だが……って、何を考えてるんだ！

危うく、ピンク色の思考の泥沼へ沈んでゆくところだったのを、

必死の思いで抜け出す。

ダメだ、急がないと俺の理性が保たない。気がつけば、布団に入ってから既に一時半が経とうとしていた。

「ええい、ままよー!」

このままではらちがあかないと思い、行動に出る。たかがボタンを閉めるだけ、どなたでもできる簡単な作業だ。

手が震える。 気にするな、武者震いだ。

大きな膨らみ、そしてその先端にある薄桃色の突起に目を奪われそうになる。 そっちを見るな、塩の柱になるぞ。

意図的に思考止める。今の俺はマシンだ。ただ、パジャマのボタンを閉めるだけのマシンだ。マシンに心はない。マシンにはリビドーもエロスも存在しない。

ただただ機械的にボタンを閉める作業に没頭する。

そして、マシンは、その任務を達成した。

「ニンムカンリヨウシマシタ」

マシンと化した俺は俺は機械的に告げる。しかし、ちょうどボタンを閉め終えたその刹那、妹が僅かに身じろぎをした。

ムニユリ。

手に伝わる柔らかな感触。そして、どこかしっとりとした人肌の温もり。

.....
うわぁ、やあらかぁい、

マシユマロみたいだぁ。

感情の存在しないマシンに、エロスの心が芽生えた。

状況を認識..... どうやら現在俺は、妹の乳房に触れているらしい。詳細に言うならば、世間一般的な触れるという概念から二ランク程度上の『握る』に近い圧力が掌に加わっている。

「あ.....あ.....あ.....」

どうしていいかわからず呆けることしか出来ない。思考回路はシヨート寸前だ。しかし、このままではいけないと思い行動を模索する。

……そうだなあ、とりあえずはこのムニユムニユをもう少し堪能させてもらうか。

そう思い、俺は掌に力を

「ぬがあっ！！！！」

邪念を払う、かけ声を一つ。俺は、すんでのところで正気に還った。

な、なんてこった。今、俺はきわめてナチュラルにスケベな行動を取ろうとしていた。あれが理性から解き放たれた俺の姿だとも言うのかっ！

自分自身のやらしさに戦慄を覚える。

「はっ！！！」

ふと、自分がまだ妹のオパイに触れていることに気づき、慌てて手を離す。

「お、俺はなんてことを……」

情けないが認めないわけにはいかない。どうやら俺の心は、ピンク色のフォースに染まってしまったらしい。今この瞬間、一見正気を保っているようにみえて、頭の中では次々とあふれ出るスケベな妄想の奔流が理性という名の堤防を完全に押し流そうとしている。

きつと、俺のような人間は魔法使いになつたとしても黒魔法しか使えないに違いない。白魔法を使おうにも心が汚れきってしまった。だが、汚れちまった俺にだって矜持はある。たとえ、エロスの塊になろうとも兄としての意地を捨てるわけにはいかないのだ。

しかし、実際問題、俺のリビドーの高まりは有頂天でとどまることをしらない。これを自制心だけで制御しようというのは、ここここにいたっては無理無謀な話だ。

……考える、考える、考える。最善を模索するんだ俺よ。

理性と欲望の狭間で思考を巡らせる。

……よし、これだ！

そして、結論は出た。要は発想の逆転である。沸き上がる欲望を過度に抑えつけるからこそ、反動で理性を振り切った変態行動に走

りそうになるのだ。ならば、その抑制を適度に調節してガス抜きしてやれば、ぎりぎりのところで欲望を抑え込むことが可能に違いない。

つまりそれは、妹に対して、一線を超えない範囲で適度に淫らな行為をするということの意味していた。

……すまない、妹よ。悲しいけど兄ちゃんは救いがたいエロだ。だけど、それもこれもお前が可愛すぎるからなんだ。そのことについては誇ってもいいと思う。それと、いまさらだけど、明日からもう兄ちゃんと一緒に寝るのはよしなさい。お前の兄ちゃんは妹に欲情する変態です。たぶん、このままだと兄ちゃんはいずれ大変なことをしでかします。そうになったら取り返しがつきません。実をいうと本心ではそういうのにさほど抵抗感を抱いていないあたり、兄ちゃんは本当に救いがありません。でも、いまならまだ間に合います。兄ちゃんは立派な黒魔道士になりますからお前はお前で幸せになりなさい。そういうわけで、今からちよつとだけエロいことをさせてもらうよ。これは最悪を避けるために考えた最善の策なんだ。なあに、本当のエロいことに比べたら蚊に刺されるみたいなものさ。だからもう少しだけ寝てくださいをお願いします。お願いします。妹に対して心中で事前に詫びた俺は、自己弁護完了とばかりに、行動にでる決意を固めた。

さて、適度にエロいことをするとはいつても何をしたらいいものか。もう一度胸でも揉むか？

掌に触れたあの柔らかかな感触を思い出す。アクシデントではあったがあれはよかった。マシユマロ、あるいはつきたての餅を思わせる柔らかさと弾力感、そして触れた者に安心感を覚えさせる人肌の温もりが生み出す癒しのハーモニー。世の中におっぱいフェチが存在する理由をはじめて理解できた気がする。

さっきはパジャマ越しだったが今度は直に触らせてもらうか……
って、いやいやいや、さすがにそれはまずいって！

どう考えてもそれは適度の域を超えている。そもそも妹が目覚

ましてしまつては元も子もない。

とりあえず胸は却下……と、なると……キス……か。

妹の唇に目がゆく。薄紅色のそれは、僅かにしめつていようように見えた。

……………ゴクリ。

思わず唾を飲む。実は俺にはキスの経験もなかった。ついでに言うなら女と付き合ったこともない。つまりは、純粹培養の魔法使い見習いというわけだ。

「とはいえ、さすがに唇はまずいよな……」

理性を失いかけてはいるが、それぐらいの分別はまだ有している。ならばいつたいどの辺が適当だろうか。俺は、妹の顔を正面からまじまじと見つめた。

ほっぺた……は、ちよつと物足りないか。じゃあ、首筋……は、跡が残つたらまずいしなあ。

よし！ 俺は決めた。

「おでこにしよう」

たぶん位置としては妥当だろう。それで俺の欲望もひとまず静まってくれるものと信じたい。

目標を定めた俺は、一度目を閉じると軽く深呼吸をする。部屋を支配する静寂のなか、耳に届くのは、カチカチという壁時計の音と、妹の寢息。

「それじゃ……いただきます」

誰にともなくそう告げると、俺は妹の額へ顔を寄せた。

ドクン……ドクン……。

自分の心臓が激しく鼓動しているのがわかる。

これは成り行きではなく、俺が初めて自分の意志で起こす妹へのアクション。行為の内容に関わらず、妹に手を出したという事実は俺を苛み続けるだろう。……たぶん。

実のところ、本当に罪悪感を覚えるのか自分でも疑わしかったりする。

……俺、何気に妹モノのエロゲとか好きだしなあ。やっぱ、心根がやらしいのかなあ。

そんなことをグダグダ考えているうちに、唇が触れる寸前の位置まで顔を近づけていた。ここまで来たら、もはや後には引けない。

「……えいつ！」

小さなかけ声と共に、顔を前へ突き出す。そして、俺の唇は、妹の額へと触れた。

……うわあ、俺、今、妹とキスしてるよ……。

ついに、一步を踏み出してしまった。これがマンガか何かだったら、CHU！！とかいう効果音が表示されたことだろう。唇から伝わる妹の体温。口の中に広がる甘酸っぱいようなしょっぱいような女の子独特の汗の味。それは、たまらなく甘美で、ついつい口付けしている時間が長くなってしまふ。

一秒……二秒……三秒……。だんだん頭の奥がジンジンと痺れてくる。きつと、妹の汗に混じったフェロモンが頭の中まで浸透してきたんだろう。なんだかとっても温かで幸せな気分だった。キスとというのがこんなにも素敵な行為だということをこのとき俺は初めて知った。

……すごいな。おでこに唇を触れているだけなのにこんなにも胸がドキドキしている。これが、唇と唇だったらどれだけすごいんだろう。さらにその先の行為だったらいったいどんなことに……。

押さえつけたはずの、とりとめのない妄想が再びあふれ出しそうになる。目の前の少女がとても愛おしい。

「……ふはあ」

なんのかわので十秒近くは口づけしていただろうか、俺は名残惜しげに唇を離れた。

「ごちそうさまでした」

とりあえず感謝の言葉を述べる。性欲は満たされはしなかったが、それ以外の気持ちの部分はいくら以上ないほど満たされていた。

「おそまつさまでした」

妹もまた言葉を返す。その響きはどこか嬉しげだった。

.....え？

「どうしたの、お兄ちゃん？」

石像のように、はたまた出来の悪いOSのようにフリーズして固まる俺を、不思議そうに見つめる妹。その目は、しっかりと開いている。

「.....」

「.....えへへ、なんか恥ずかしいね。お兄ちゃんにキスされちゃった」

.....き、緊急回避iiiiiiii!!!

!!!

突然の緊急事態に、俺は頭をフル回転させ窮地を脱するための方法を必死に模索する。

よし、こうなったらこれでいくしかない。

刹那の逡巡の後、俺がとった行動、それは、

「ぐうーぐうー、ぐうーぐうー」

狸寝入りだった。

いや、ちがうな、そもそも俺ははじめから起きてなどいなかった。

これはきつと夢だ。そういうことにすれば何も問題はないはずだ。

そうだ、それがいい、そうしよう。

「むう、いまさら寝たふりなんて男らしくないぞお」

ち、ちがうよ、寝たふりなんかじゃないよ。これは本当に寝てるんだよっ。

「妹にキスしたくせにい、いただきますとか言いながら、キスしたくせにい」

う、ううう.....、そ、それはアレだ、寝返りをうった拍子に唇が触れただけなんだ。ほ、ほら、狭い布団で一緒に寝てるんだからそ

ういうことだつてありえるだろ。

「それにい、わたしのおっぱいをさわってたことだつて全部知ってるんだぞお」

ええええっ！ その時から起きていらっしやっただんですか！

「なんだかおなががスースーするなあ、って思ったら、お兄ちゃんがわたしのパジャマにいたずらしてるんだもん。びっくりしちゃった」

ち、違っ、それはお前がだらしなないせいでボタンが外れてたのを直してあげようとしただけで別に下心は……。

「わたしのおなかをさわったりい、おっぱいをムニユムニユ揉んだりい、ほんと好き放題だったよねえ。エロいお兄ちゃん」

確かにお腹を触ったのは事実だ。俺がエロであることも百歩譲って認めよう。だがな、胸を触ってしまったのはお前が体を動かしたからだろうがッ！ いや、触るだけでなくちよっとだけ揉んだりしたかもしれないが、それは俺が心神喪失状態でしたことであつて、自分の意志でしたことじゃないんだ。本当だよ。

「お〜き〜ろ〜、目を開けるんだエロエロお兄ちゃん〜。起きてちやんとごめんなさいしろ〜」

謝罪をせまる妹の声はどこか楽しそうだ。

「ぐがあ〜ぐがあ〜」

それに対して狸寝入りを続ける俺。謝りたいのはやまやまだが、謝ったら最後、妹の胸を揉んだりキスをしたりしたことが既成事実として成立してしまう。それだけはなんとしても避けたかった。

「起きないなら、こつだつ。……えいっ！」

「げふっ！」

妹が俺の上に飛び乗ってくる。いわゆる馬乗りの体勢、俗に言うマウントポジション。

「んっふっふっ、これで身動きはとれまい」

妹が俺の上で勝ち誇る。下になった者が圧倒的に不利なこの体勢は、ブラジリアン柔術が生み出した格闘技における究極のシステム

の一つだ。今でこそいくつかの対処法が編み出されはしたものの、柔術が世に姿を現したばかりのころは、数多の猛者がこのシステムに対応できずに散っていった。

まずい、このポジションを取られてしまつては、煮るのも焼くのも上になつた人間の自由だ。コイツ……、いったいどうするつもりだ？

「あのねえ、お兄ちゃん」

妹が、どこか改まつた感じの口調で言った。

「わたしは別に怒つてるわけじゃないんだよ。ただね、ああいうことがしたいんなら、ちゃんと面と向かつて口に出して言つてほしいの。そうしたら、好きなこと、なんでもさせて、あげる」

なん……だと……！？ ならばッ！ ならばならばならばッ！

『ぜひ、その柔らかい胸をもつ二度、三度ッ！』

そう口走りかけて、危うく踏みとどまる。

いかん！ 落ち着け俺よ！ これは罠だ、悪魔の誘いだ！！

「ぐっ……ぐうぐう……ぐうぐう」

再び狸寝入り。俺はひとまず誘惑に勝つた。だが、無理に自分をおさえつけたせいか脂汗がひどい。表情もひどく歪んでいることだろう。それを悟られていなければいいが……。

「むう、そんなに汗かいてまで我慢するなんて素直じゃないなあ。わたしにいたずらしたいなら面と向かつてそう言えばいいのに」

だ、誰が面と向かつて言えるかそんなことっ！ 俺は仮にも兄貴だぞ。

「仕方ないなあ。それじゃあ、素直になれないお兄ちゃんのためにわたしがひと肌脱いであげるね。」

そう言うつと妹は、俺の上でなにやらもぞもぞと動き始めた。

「んっ……よいしょっつっ」

衣擦れの音が耳に届く。

こ、コイツ………いったい何をしてるんだ。まさかパジャマを脱いで……いや、まさかな。

「ふう……、さて、お兄ちゃんに問題です。わたしは今、いったいどんな格好をしているでしょうか？」

ど、どんな格好か、だと！？ そんなの目を開けなければ確かめようがないじゃないか。くそう、なんてこった。

「うふふ、知りたかったら目を開けてもいいんだよお」

ぐっ……、し、知りたい。しかし、ここで目を開けるわけには……

……。そうだ！ 薄目を開けて見ればいいのかッ！

そう思い実行に移そうとした瞬間、手で目のあたりを塞がれた。

「おっと、薄目で見ようなんてズルはダメだよお」

ぐぬぬ、無駄にするどい奴め。

「見たいなら、ちゃんと『手をどけてください』って言わないと、だぐめえ」

ギギギ、くやしいのう、くやしいのう。さて、どうするよ俺。素直にお願いするか？ いや、なにバカなことを考えてやがる。ここで折れたら理性のタガが外れて一線を越える可能性大だぞ。堪えろ、堪えるんだ！ 大丈夫、俺ならやれる。

俺は、必死に自分に対して言い聞かせた。ここで、妹にしでかしたことを全部認めて流れに身を任せれば全て終わるのかもしれないだが、そうすれば、俺たちが今まで続けてきた兄妹としての正しいあり方さえも終わってしまうような気がしてならなかった。

……。それだけは避けないとな。

兄妹として、家族として過ごしてきたこれまでの温かな日々が頭をよぎる。すっかり消えてしまったような気がしていた自制心という名の火が、今、再び灯り始めた。

「それじゃあ、わたしが今どんな格好をしているか、お兄ちゃんにヒントね」

……。楽しそうなところすまないな妹よ。悪いが、兄ちゃんはもう大丈夫だ。一時とはいえ、お前に変な気を起こしかけたことは謝るよ。俺はやっぱりお前の兄ちゃんなんだ。それ以上でもそれ以下でもないんだ。だからさ、このまま寝たふりを続けさせてもらおうよ。それ

強く握りしめてしまう。

「やあん！ そんなに強く揉んじゃだめえ！」

妹の上げた嬌声がさらに混乱に拍車をかける。目を塞がれているため確認することはできないが、俺の手によって強く握られたたわわな乳房は、イイ感じにいやらしく形を変えているに違いない。

その時、俺の頭の中にエマージェンシーコールが鳴り響いた。

い、いかん！ 俺の魔法ステッキに魔力が通い始めやがった！魔法使いに比べて、まだ悟りの足りない魔法使い見習いは、魔法ステッキの制御があまりなのが通例である。ましてや、女人の乳房を生で触るなどしては、魔力が暴走を始めるのもやむ無しと言うほかない。

ややや、やべえ！ 本当にやべえ！！！！

魔法ステッキの暴走が露見しては一大事だ。俺は必死に魔力の暴走を抑えにかかった。

……ええと、こういうときは教科書の問題やなんかを思い浮かべるといいんだっけか。

しかし、俺が教科書を開いていた時代はすでに遠く、とてもその内容なんか思いだせそうにない。そんな中、昔国語の授業で習った芥川龍之介の小説の一節だけが頭に思い浮かんだ。

それは確か、杜子春とかいう題名の作品だったはず。前後のいきさつは忘れてしまったが、主人公の杜子春が仙人になる修行の一環として、何があっても口を聞いてはならないと師匠から言いつけられるのだ。

今の俺の状況は、その時の杜子春によく似ている。俺もまた、何があっても口や目を開くわけにはいかない。

……でも、杜子春は修行を乗り越えれば仙人になれるかもしれないけど、俺がなれるのは魔法使いなんだよなあ。とほほ。

心中でため息をついた瞬間、気が抜けてしまったのだろう。努力の甲斐むなしく、ステッキは暴走の限界に達し、そして、最悪の事態は起こった。

「んん？」

妹が何かに気づいたような声を上げる。俺の体に、得体のしれない緊張感が走った。

ま、まさか。気づかれたのか！？

妹はなにやら馬乗りの体勢から体の向きを入れ替えているようだ。

「……………」

沈黙が、なんだかすごく気まずい。

……………お、おい、どうしたんだよ。

いったい今、妹の視線の先がどこに向いているのか。それが気になつてしょうがなかった。

「お、お兄ちゃんの……………変態……………」

妹が口にしたその言葉に、俺は全てを理解した。

……………終わつた。

脱力感が俺を包む。兄としての威厳はもろくも崩れ去つたのだ。

「ほんと、変態だよ。わたしをはだかにさせて、おっぱいまで揉んで、それで、こんなところをおつきくさせてるなんてさあ」

……………色々つつこみたいところもあるけど、もうめんどくさいからいいや。変態な兄ちゃんですまぬ。

「お兄ちゃんのエロエロエロ、どエロ〜」

うう、面目ないでござる……………。

「まあ、それでもお〜、意地っ張りで目も開けてくれないお兄ちゃんよりは正直者のこっちのほうが好きかなあ……………えいつ！」

うわああああ！！こ、コラコラコラア！！女の子がそんなところ触つたらいかんって！！

「うわあ〜すごい力チカチ〜、それになんとかあつついねえ〜」

だ、だめだつてば。お願いだからもうよしてください。魔法ステツキから魔力があふれ出したら本当に洒落にならないんです。

俺はもはや妹のなすがままだつた。だけど、どこか心の奥にそれを不快とは感じていない自分があるのもまた事実で、そのことを意識するたびに、自分が真性の変態であることを自覚せずにはいられ

「人肌で温めてもらうつからいいもん」

「温めてもらうつて、誰に？」

「もちろん、お兄ちゃん」

妹はニコニコ顔で俺を指さす。なんだかクラクラと目まいがした。

「あ、まず最初はキスからがいいなあ。今度はおでこじゃなくてちやんと唇にしてね」

妹は嬉しげにそう言つと、俺に顔を寄せてきた。

「ま、待ってくれ！ 心の準備が……」

「だめ、待たない。んんん、はやくはやく」

妹は目をつぶり、唇を突き出す。

……さあ、どうする。ここでキスをしたら間違いなく最後までいっ
てしまうぞ。

俺は決断を迫られる。その時、ふと、さっき思い浮かんだ杜子春
の話のオチが頭によみがえつた。

ああ、そういえば結局、杜子春は声を上げちまつて、仙人には
なれなかつたんだよなあ……。

果たして俺は、魔法使いになるのだろうか、はたまたここで魔法
使いの資格を喪失してしまうのか。そのさきはまた、べつのおはな
し。

(後書き)

続きを読みたい方はわっふるわっふるでも書き込んでくださあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1175u/>

魔法使い見習いの夜

2011年6月16日13時40分発行